

日本出版クラブ「洋書の森」主催
翻訳者のためのウィークエンド スキルアップ講座 第23回

宮脇教室5限目

「基本にかえれ」

— 単語編 —

corn はトウモロコシ？



お待たせしました。みなさまからの熱いご要望にお応えし、1年2か月ぶりの宮脇教室のご案内です。

過去4回の講座で、小説の書き手の意図の読み取り方、書き手との向き合い方、辞書に頼りすぎない訳語選び、一人称小説の訳し方をテーマに取りあげてきましたが、今回は翻訳の基本の“き”の単語です。知っているつもりでも、思いもよらない意味や使い分けがあるかもしれません。

たとえば、ふだんよく目にする単語cornで頭に浮かぶのは何ですか？ 茹でたり、焼いたりするとおいしい黄色いあの食べ物——そう、トウモロコシですよ。たしかに米国では、飼料用も食用も含めてトウモロコシをcornと呼びます。でも、英国でトウモロコシはmaize。だとしたら、cornには別の意味もありそうです。それに気づかず“corn = トウモロコシ”と思い込んで訳すと……。

こういうとき、どうすれば気づけるのでしょうか。今回の講座では、課題を解説しながら、単語レベルでの誤訳の実例をあげ、それを防ぐ方法を伝授していただきます。なお、席数には限りがございますので、参加申込みはお早めに。

◆ 参加要項 ◆

日 時

2016年8月20日（土） 15：00～17：00（受付開始14：30）

講 師

宮 脇 孝 雄 氏（翻訳家／随筆家）

会 場

日本出版クラブ会館・セミナールーム
（新宿区袋町6番地 都営大江戸線牛込神楽坂駅より徒歩2分）
<http://www.shuppan-club.jp/>

参加費

講座 2,200円（資料代を含む）

定 員

80名（申込順、定員になり次第締切らせていただきます）
「洋書の森」未会員の皆さまもご参加になれます
希望者による恒例の交流会（参加費3200円・食事代を含む）を講師同席のもと17：30より、
会場1Fレストラン・ローズルームにて開催いたします
参加ご希望の方は同時にお申込みください

お申込み・お問合せ

お名前・洋書の森会員番号（会員の方）・ご連絡先電話番号、アドレス・参加人数を明記して「8/20(講座のみ or 講座・交流会とも)参加希望」と以下アドレス宛てにE-mailにて送信してください

(財)日本出版クラブ内 「洋書の森」事務局
E-Mail : yousho@shuppan-club.jp TEL 03(3260)5271

◆講義内容◆

文章は単語でできていますが、その単語の訳し方によって、訳文の印象はがらっと変わります。

たとえば、surprise も astonish も amaze も astound も人を驚かせることですが、

The news surprised me.

も、

The news astonished me.

も、

The news amazed me.

も、

The news astounded me.

も、みんな「その知らせにぼくは驚いた」と訳していませんか？

これを訳し分けるといい訳文が書けるようになる、というのが今回の話です。

ランダムハウスなどを見ると、

surprise 「驚かす」意の一般語で、主に予期しないことで驚かす。

astonish 信じられないほど驚異的なことで驚かす：

amaze 驚異的なことで当惑するほど驚かす：

astound 驚きのあまりぼう然自失させる：

などと出ていますので、意識すれば訳し分けるのは簡単だと思います。

今回の講義では、形容詞や名詞も含めて、単語の意味を洗い直す方法を考えてみます。その結果、訳文のレベルが大幅にアップするのを示したいと思います。

課題文は二十世紀初頭のイギリス英語ですので、イギリスの辞書を参考にしてください。

訳文の添削を希望される方は、

8月10日(水)15:00までに「洋書の森」事務局へ届くようにメールでお送りください。いつものように添削答案は氏名を消し、疑問の残る箇所には傍点を引いて当日の講義時間に配布いたします。「たいへんよくできました」を目指してがんばってください。

課題文

ミステリの古典であるG・K・チェスタトンの『ブラウン神父の無心』(The Innocence of Father Brown) に収録された有名な短篇「奇妙な足音 (The Queer Feet)」の冒頭部分です。アンダーラインのある三箇所 (A、B、C) を訳してみてください。

If you meet a member of that select club, "The Twelve True Fishermen," entering the Vernon Hotel for the annual club dinner, you will observe, as he takes off his overcoat, that his evening coat is green and not black. If (supposing that you have the star-defying audacity to address such a being) you ask him why, he will probably answer that he does it to avoid being mistaken for a waiter. You will then retire crushed. But you will leave behind you a mystery as yet unsolved and a tale worth telling. ①

If (to pursue the same vein of improbable conjecture) you were to meet a mild, hard-working little priest, named Father Brown, and were to ask him what he thought was the most singular luck of his life, he would probably reply that upon the whole his best stroke was at the Vernon Hotel, where he had averted a crime and, perhaps, saved a soul, merely by listening to a few footsteps in a passage. He is perhaps a little proud of this wild and wonderful guess of his, and it is possible that he might refer to it. But since it is immeasurably unlikely that you will ever rise high enough in the social world to find "The Twelve True Fishermen," or that you will ever sink low enough among slums and criminals to find Father Brown, I fear you will never hear the story at all unless you hear it from me.

The Vernon Hotel at which The Twelve True Fishermen held their annual dinners was an institution such as can only exist in an oligarchical society which has almost gone mad on good manners. It was that topsy-turvy product--an "exclusive" commercial enterprise. That is, it was a thing which paid not by attracting people, but actually by turning people away. In the heart of a plutocracy tradesmen become cunning enough to be more fastidious than their customers. They positively create difficulties so that their wealthy and weary clients may spend money and diplomacy in overcoming them. ② If there were a fashionable hotel in London which no man could enter who was under six foot, society would meekly make up parties of six-foot men to dine in it. If there were an expensive restaurant which by a mere caprice of its proprietor was only open on Thursday afternoon, it would be crowded on Thursday afternoon. The Vernon Hotel stood, as if by accident, in the corner of a square in Belgravia. It was a small hotel; and a very inconvenient one. But its very inconveniences were considered as walls protecting a particular class. One inconvenience, in particular, was held to be of vital importance: the fact that practically only twenty-four people could dine in the place at once. The only big dinner table was the celebrated terrace table, which stood open to the air on a sort of veranda overlooking one of the most exquisite old gardens in London. Thus it happened that even the twenty-four seats at this table could only be enjoyed in warm weather; and this making the enjoyment yet more difficult made it yet more desired. The existing owner of the hotel was a Jew named Lever; and he made nearly a million out of it, by making it difficult to get into. Of course he combined with this limitation in the scope of his enterprise the most careful polish in its performance. The wines and cooking were really as good as any in Europe, and the demeanour of the attendants exactly mirrored the fixed mood of

the English upper class. The proprietor knew all his waiters like the fingers on his hand; there were only fifteen of them all told. It was much easier to become a Member of Parliament than to become a waiter in that hotel. Each waiter was trained in terrible silence and smoothness, as if he were a gentleman's servant. And, indeed, there was generally at least one waiter to every gentleman who dined. ©

◆講師略歴◆

宮脇孝雄（みやわき たかお）

1954年2月14日、高知県土佐市生まれ。高知県は東京都より面積が広いが、人口は杉並区より少なく、しかもその八割が高知市に集中しているため、県庁所在地を少し離れると一キロ四方自分以外誰もいないという場所がよくあり、少年時代から人間ではなく昆虫や鳥や魚と戯れることを好んだ。実家の右隣はお菓子屋、左隣は本屋で、字が読めるようになるとお菓子を食べながら本を読む生活を満喫するようになる。実家は映画館経営で、本を読んでいないときは映画館に入り浸る小学生だった。大学時代に参加した推理小説サークル（ワセダミステリクラブ、略称WMC）の先輩、大井良純氏（翻訳家、故人）に小鷹信光氏と菅野罔彦氏（早川書房編集者のちに編集長、故人）を紹介していただいて、この道に入る。もともとはSFファンだったが、WMCで折原一氏（のちの作家）から古本屋巡りの手ほどきを受けたり、入れ違いに卒業したM氏（のちの作家、北村薫氏）が部室に残していったエラリー・クイーンや鮎川哲也を読むうちにミステリに目覚める。大学二年のとき「ミステリ マガジン」に短篇を訳したときにもらったのが最初の原稿料、その四年後に単行本（早川ポケミス、ジョイス・ポーター著『殺人つきパック旅行』）を出してもらったときに振り込まれたのが最初の印税。以後、四十年ほど売文生活を送る。

主な著書

『書齋の旅人－イギリス・ミステリ歴史散歩』（1991年）早川書房、『書齋の料理人－翻訳家はキッチンで…』（1991年）世界文化社、「『煮たり焼いたり炒めたり』早川文庫、『翻訳家の書齋－〈想像力〉が働く仕事場』（1997年）研究社、『ペーパーバック探訪－英米文化のエッセンス』（1998年）アルク、『翻訳の基本－原文どおりに日本語に』（2000年）研究社、『続・翻訳の基本』（2010年）研究社、『英和翻訳基本辞典』（2013年）研究社。

主な訳書

トーマス・トンプスン 『血と金 ある富豪の愛と執念』 小鷹信光共訳、パシフィカ、1977年、ジョイス・ポーター 『殺人つきパック旅行』 早川書房、1978年、リチャード・スターク 『悪党パーカー 殺戮の月』 早川書房、1979年、コリン・ウィルコックス、ビル・プロンジーニ 『依頼人は三度襲われる』 文藝春秋〈文春文庫〉、1979年、リチャード・エイヴァリー 『タンタロスの輪 コンコラッド消耗部隊』 東京創元社〈創元推理文庫〉、1980年、ウィルコックス 『容疑者は雨に消える』 文藝春秋〈文春文庫〉、1980年、ウィルコックス 『女友達は影に怯える』 文藝春秋〈文春文庫〉、1980年、テランス・ディックス 『盗まれた名画をさがせ』 ティビーエス・ブリタニカ（ベーカー街少年探偵団）、1981

年、M. S. バリー 『サイモンと魔女』 ティビーエス・ブリタニカ、1981年、グレゴリー・ベンフォード、ゴードン・エクランド 『もし星が神ならば』 早川書房のち文庫、1981年、ウィリアム・ディール 『シャーキーズ・マシーン』 角川書店、1982年、テリー・カー 『聖堂都市サーク』 早川書房〈ハヤカワ文庫〉、1984年、ジェイムズ・マクルーア 『小さな警官』 早川書房、1984年、アーサー・ライアンズ 『ハード・トレード』 河出書房新社 のち文庫、1985年、W・ケリー、E・W・ウォーレス 『目撃者 刑事ジョン・ブック』 角川書店〈角川文庫〉、1985年、クライヴ・バーカー 『ミッドナイト・ミートトレイン』 集英社〈集英社文庫〉、1987年、ジョン・コーンウェル 『地に戻る者—イギリス田園殺人事件』 早川書房、1988年、フリーマントル 『名門ホテル乗っ取り工作』 新潮社〈新潮文庫〉、1989年、パトリック・マグラア 『血のささやき、水のつぶやき』 河出書房新社、1989年、ジェーン・デンティンガー 『そして殺人の幕が上がる』 東京創元社〈創元推理文庫〉、1991年、ヨゼフ・シュクヴォレツキー 『ノックス師に捧げる10の犯罪』 宮脇裕子共訳、早川書房、1991年、ディーン・R・クーンツ 『ストレンジャーズ』 文藝春秋〈文春文庫〉、1991年、デンティンガー 『誰も批評家を愛せない』 東京創元社〈創元推理文庫〉、1992年、パトリシア・ハイスミス 『女嫌いのための小品集』 河出書房新社〈河出文庫〉、1993年、イアン・マキューアン 『イノセント』 早川書房 のち文庫、1993年、ジェフ・ニコルソン 『食物連鎖』 早川書房、1995年、ジョン・ダニング 『死の蔵書』 早川書房〈ハヤカワ文庫〉、1996年、C・W・ニコル 『スケッチの音』 エム・ピー・シー、1999年、メアリー・M. モーリス 『逃避行』 集英社〈集英社文庫〉、1999年、ウィリアム・J. パーマー 『文豪ディケンズと倒錯の館』 新潮社〈新潮文庫〉、2001年、ドロシー・L・セイヤーズ 『顔のない男—ピーター卿の事件簿〈2〉』 東京創元社〈創元推理文庫〉、2001年、グラディス・ミッチェル 『ソルトマーシュの殺人』 国書刊行会、2002年、ハイスミス 『回転する世界の静止点—初期短篇集1938-1949』 河出書房新社、2005年、ハイスミス 『目には見えない何か—中後期短篇集1952-1982』 河出書房新社、2005年、マシュー・ニール 『英国紳士、エデンへ行く』 早川書房、2007年、『ジーン・ウルフの記念日の本』 国書刊行会、2015年。